日本のポー研究書誌連載(11)　2020 年～現在

＜著書＞

伊藤詔子『[新編エドガー・アラン・ポー評論集] ゴッサムの街の人々他+[論説]コロナ時代にニューヨーク作家ポーを読む』小鳥遊書房、2020 年。

＜シンポジアム報告＞

『ポー研究 第 12 号』（日本ポー学会）12（2020 年）33-81。

「ポー、トピカル／ポー、トロピカル 」

伊藤詔子「はじめに」

福島祥一郎「ポーとニューヨーク――「スフィンクス」にみるトポスと視覚の関係性」

西山智則「「南の国から」の恐怖――ポー、ハイチ、ゾンビ」

伊藤詔子「萩原朔太郎の中のポー――『定本青猫』〈浦（Ula）詩篇〉の謎に迫る」

高山宏「浮遊と定位――ポーとマニエリスム」

＜論文、エッセイ、講演記録、書評など＞

青柳いづみこ「ドビュッシー未完のオペラ『アッシャー家の崩壊』演奏会」『ポー研究 第 12 号』83-91。

伊藤詔子・西山智則「対談　短剣を手に、世界の終末を生き残る」『週刊読書人』(第 3375)2021 年 1 月 29 日。

岡本晃幸「推理は詩作のごとく――“The Murders in the Rue Morgue”と“The Purloined Letter”における詩的想像力、斬首、フランス革命」『ポー研究 第 12 号』3-16。

小澤奈美恵「E・A・ポーと先住民作家ウィリアム・エイプスの接点――『アーサー・ゴードン・ピムの物語』に隠された「アメリカ先住民=消えたイスラエルの十部族」説」『ポー研究 第 12 号』17-32。

神谷光信「コロナ禍の日本を照射する小説――エドガー・アラン・ポー『旋渦に呑まれて』『季報唯物論研究』(「唯物論研究」刊行会) 153 (2020 年) 80-82。

巽孝之「巻頭言　二つの南――松本清張記念館特別企画展と第２回スペイン国際ポー会議」『ポー研究』1-2。

Tatsumi Takayuki. “Editing and Anthologizing Poe in Japan.” Anthologizing Poe: Editions, Translations, and (Trans)National Canons, edited by Emron Esplin, Margarida Vale de Gato, Lehigh UP, 2020, pp. 351-367.

――.「アメリカン・ゴシックの瞬間」『幻想と怪奇５ アメリカン・ゴシック――E・A・ポーをめぐる二百年』新紀元社、2021 年。14-15。

西山智則「色彩の悪夢――エドガー・アラン・ポーと疫病ゴシック」『幻想と怪奇５ アメリカン・ゴシック』121-129。

福島祥一郎「分身、メスメリズム、視覚――エドガー・アラン・ポーのメスメリズム物語における物質性」立命館大学英米文学会編『英語文学の諸相』金星堂、2020 年。112-127。

――.書評「西山けい子著『「エドガー・アラン・ポー――極限の体験、リアルとの出会い』――「無気味なもの」の向こう側」『図書新聞』2020 年 6 月 14 日、3451 号。

森本光「死者と横たわること――ポーの『大鴉』をめぐって」竹井智子・高野泰志編『テクストと戯れる――アメリカ文学をどう読むか』松籟社、2021 年。

王 洋「絡み合う漢詩文とエドガー・アラン・ポー――谷崎潤一郎「西湖の月」における酈小姐像を手がかりに」『立命館文學』(立命館大学人文学会) 669 (2020 年) 3-13。